

---

---

# 歌物語の中での理想的な男性像と 恋愛のパラダイム

マルティン・ティララ

〈カレル大学〉

---

人間が与えられた感情の中で一番美しい、そして一番恐ろしいのは、愛情だと言える。愛情には様々な種類があり、その分類や内容は人や時代によって異なる。文学と最も密接な関係があるのは、恋愛である。恋愛という表現は英語のラブに相当する言葉であるが、文学作品の場合は、ロマンティックラブの意味を持っている。万人共通の感情であるが、無論、時代や社会が違えば、恋愛のパターンも少し変わる。それぞれの文学は独特な恋愛パラダイムを作る。平安時代文学はこの点で、特別な位置を占めている。中古の和歌・日記・物語などは、恋愛に満ちている。特に物語文学の中で、一つの共通テーマを探せば、恋愛というテーマが出てくる。『源氏物語』までの物語文学を大まかに分けると、作物語と歌物語に分かれているが、両方の中で、主人公は愛の道を歩んだり、愛に悩んだり、愛に困ったりしている。

和歌は平安時代の貴族階級にとって不可欠なコミュニケーション手段であり、優美な会話の代わりに使われた。求婚者、恋人などは普段、和歌を交わした上で、関係を作っていた。和歌はある意味で、現在のメール機能のようなものである。現在の若者は直接会わないで、メール、チャットなどの手段でコミュニケーションを取っている。平安時代の貴族の男女も最初は直接会っておらず、和歌の創作が上手でなければ、恋愛関係が成り立たなかった。要するに当時の恋愛のパラダイムは和歌の世界で作られていた。そのため、私たちは、和歌を中心として構成された歌物語が恋愛をテーマにしていたということに、驚きを受けないであろう。歌物語は基本的にいくつかの段からなり、主人公とその相手の和歌により、様々な場面が設定されている。100パーセントとは言えないが、ほとんどの段は男女関係の話である。特に、歌物語を代表する『伊勢物語』にはこういう段が多く、恋愛がテーマとなっている。

『伊勢物語』は日本文学史上で主要な位置を占めている。平城天皇の子孫の在原業平はその主人公だと言われているが、実在の登場人物というよりは架空の人物であり、当時の理想的な男性だったと言われている。その男性「男」あるいは「むかし男」は理想的な文化世界の代表者であった。その世界は日本の美意識に深い関係のある「みやび」の世界であり、歌物語のテーマとしての恋愛にも関わりがある。

近年、「みやび」という美的範疇は『伊勢物語』と結び付けられているが、その例はそれ以前の作品の中にもみつけることができる。「みやび」という言葉の定義は沢山あるが、よく出てくるのは「宮廷風」か「都会風」である。『伊勢物語』のいくつかの段で、この美意識のあらゆる層でこの意味を認識できるが、その具体例を見る前に、「みやび」の起源と他の美的概念との関わりを検討する必要がある。

「みやび」という言葉の用例は、現存している最も古い日本文学作品である『万葉集』の中に初めて出て来る。『万葉集』にはこの言葉が十回程出てくるが、その使い方と綴りは一貫していない。最も有名な例は以下の和歌に見られる。

烏梅能波奈 伊米尔加多良久 美也備多流 波奈等阿例母布 左氣尔于可倍許曾(『万葉集』巻五・八五二)

訳：梅の花は夢で次のように言いました。「あたしが優雅な花だと思ったら、酒に入れて、あたしの美しさをぞんぶんにたのしめ。」

この場合だけ、音節毎に万葉仮名を当て「美也備」と記してある。他の用例として「風流・風姿・閑雅・藻・温雅・雅妙・遊」などの漢字の訓読みが見られる。確かに、これらは似ている言葉であるが、全く同じ意味ではない。共通しているのは優雅な事、洗練された行為ということではないであろうか。

どの言葉も奈良時代の「みやび」の美的概念のアスペクトだと考えてもいいと思う。「みやび」の語源を考えると、「み」という敬意を表す接頭語と「屋」か「家」を意味する「や」から成っている。構成された単語「みや」は「宮・宮廷・天皇・天皇家」などの意味がある。「みや」に付いている接尾語「び」は「風・式・ように」だと解釈されている。現代日本語の「宮廷風」という解釈は語源に基づいているようである。「みやび」の深層、いちばん古いレイヤーは天皇家、王朝の人々の行為に関係があるようである。しかしながら、前述した歌を見ると、「美しい・優雅な」というほうがもっと自然な解釈だと思える。似通った意味、雰囲気以下を以下の「みやび」という言葉を使っていない短歌で見ることができる。

春日野之 浅茅之上尔 念共 遊今日 忘目八方 (『万葉集』十卷・一八八〇)

訳：今日は浅茅が沢山生える春日野で良い友達とあそんだ。この日を忘れることはできないだろう。

春野尔 意将述跡 念共 来之今日者 不晚毛荒糲 (『万葉集』十卷・一八八二)

訳：良い友達と春の野を楽しむために来た。今日は日が暮れなければいいのに。

この二つの歌を詠んだ人は友達と一緒に美しい自然を楽しんで（遊んで）いる。このような短歌では歌人はいつも友達と遊んだり、会話したりしている。美しい自然を楽しむため、会話あるいは和歌が不可欠な役割を果たしていた。一八八二番の歌にも八五二番の歌にも「遊び」という言葉が出ている。「あそび」というのは、①音楽を奏すること、②歌を詠むこと、③お酒を飲むこと、④狩をすることなどの意味がある。八五二番の歌に梅の花はお酒の杯に入れてもらいたいと言っているが、その歌は「あそび」の時、宴会、現代語で言えば「おしゃれなパーティー」の時に詠まれたようである。一八八〇番の歌と一八八二番の歌には「みやび」という言葉は含まれていないが、美意識の概念としての「みやび」をよく示している。優雅なものを楽しむ「遊び」は「みやび」の古いアスペクトの一つだと思ってもいいであろう。

もう一つのアスペクトは『万葉集』の歌で見られる。それは恋愛若しくは求愛に関係がある。

遊士跡 吾者聞流乎 屋戸不借 吾乎還利 於曾能風流士 (『万葉集』二卷・一二六)

訳：みやび男だと聞いたが、あたしを宿に入れてくれないで、そのまま帰した。いんちきのみやび男め！

遊士尔 吾者有家里 屋戸不借 令還吾曾 風流士者有 (『万葉集』二卷・一二七)

訳：僕がみやび男だということを見せただろう。君を宿に入れて帰したからこそ、みやび男ではないか。

最初の歌は、大伴田主という優雅な貴人を誘惑してみた石川女郎という女性が詠んだ。石川女郎が乞食の格好をし、田主の家に薪を頼みに来た振りをしている。しかし、成功せず、そのまま帰された。石川女郎は、田主はその乞食が彼女だと分からなかったと思い、一二六番の歌を贈った。噂の色男ではないと怒って詠んでいる。二つ目の歌はそれに答える田主の返答であり、自分が本当にみやび男だと主張している。彼女に誘惑されなかったからこそ、優雅な貴人だと言っている。女性が一人で男の人の家に性的な行為のために赴くのは、当時普通ではなかった。石川女郎はマナーを犯してしまったのである。

「みやび」の文化は新しく造られた都、平城京で徐々に形作られた。平城京で行われる恋愛には順序やマナーがあり、その品の良い恋愛ができる当時の男性は「風流士（みやびお）」と呼ばれていた。『万葉集』の「風流士」は「みやび」の文化の代表者であるが、この場合は「みやび」は品の良い洗練された恋愛行為を意味している。

この「みやび」のアスペクトの背景に中国文化の「風流」という美的範疇を見ることができる。「風流」、中国語で「feng-liu」は歴史の流れで様々な変化を遂げたが、その意味を時代によって三つに分けることができる。儒教的な「貞操」と道教的な「優雅な遊び」と「好色」である。一つ目の「貞操」は「風流」と表記して、「みさお」と読む用例が『日本霊異記』に出ている。

大倭国宇多郡漆部の里に、風流なる女有りき。 (『日本霊異記』第十三)

訳：大和の国宇多の郡ぬりべの里に、心の高潔な女がいた。

残りの二つ、「優雅な遊び」と「色好み」、「風流」と表記して、「みやび」と読む用例を『万葉集』に見ることができる。『万葉集』では「風流」と「みやび」は同じ事を指していたと思える。奈良時代の「みやび」は既に多重層の美意識となっていたに違いない。

平安時代の『伊勢物語』に「みやび」の用例は一つしかないが、物語全体が「みやび」の概念とも取れる。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず  
となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもちずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに  
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。 (『伊勢物語』初段)

初段で主人公「むかし男」は旧京（奈良）に狩に（遊びに）行き、そのさびれた町に似合わない、とても美しい姉妹を垣間見てしまう。「みやび」の代表者、「風流士」として、彼女たちの美しさを褒めるために、そして自分の恋の深さを表現するために、和歌を詠み、その歌を自分のファッションな狩衣の裾から千切った布の切れ端に書いて贈る。情熱的で気の利いた歌とスマートな行動で、美との出会いに反応している。初段の最後の文章は注目すべき文章である。

昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

「昔男」は「いちはやきみやび」を見せる人だったというコメントであるが、「いちはやきみやび」は大胆で、その場で現される「みやび」だと思われる。この「大胆なみやび」は『万葉集』の「宮廷風」と「優雅な」みやびとは違う新しい美的概念だと言ってもいいであろう。また「色好み」とも言えない。『伊勢物語』の作者たちは当時の人に新しい美意識を紹介していたようである。主人公はただの情熱ではなく、洗練された和歌を贈っている。「色好み」と違い、「いちはやきみやび」の場合は、行動で伝統ある高い文化を伝えようとしている。しかし、その伝え方は独特であり、過剰でもある。奈良時代の「みやび」のそれぞれのアスペクトも独特であったが、大胆で、激しくはなかった。

『伊勢物語』には初段と同じような場面が沢山あり、頻繁に即興で何かをした話が出てくる。即興と独創力は『伊勢物語』の「みやび」に不可欠な要素であった。そのみでなく、『伊勢物語』の著者たちの新し

い美意識には奈良時代の「みやび」の аспек트가すべて含まれている。元々の語義もその他の「みやび」の意味も主人公在原業平に当てはまる。業平は二人の天皇の子孫で、「みやび=天皇家」の昔の文化の代表者であった。しかし、この元々の「みやび」の意味は『伊勢物語』ではメインの意味で使われていなかった。主人公は当時の天皇制を支えておらず、藤原家に奪われつつある平安初期の天皇家に、ある意味で抵抗していた。藤原基経の妹で、清和天皇の女御になる高子と、天照大御神に奉仕する伊勢の斎宮になっていた活子内親王との情事はその例である。

主人公はいくつかの段で罰として、あるいは、反省をするために、東国へ行く。この有名な「東下り」の話は重要な役割を果たしている。「みやび」と「鄙び」の対比を、「都会風」の文化に馴染んだ主人公が田舎へ行くことにより表現している。「鄙び」の背景で「みやび」の洗練された文化がより際立ち、読者には「みやび」の素晴らしさが一層分かりやすくなるのである。初段の話を奈良に設定したのも、読者（聞き手）にインパクトを与えるためだったと考えられる。

そして、もう一つの「みやび」の аспек트를考えなければならない。「みやび」と「風流」の一つのレイヤーは「色好み」だと先ほど述べた。『伊勢物語』の主題は間違いなく愛のことであるから、「色好み」の話は何度も出てくるわけである。「色好み」は「恋愛や情交を好み、その情趣を歌などの遊芸に表現する行為や人のこと」（高橋亨）である。しかし、「色好み」の主体はもともと権力者で、天皇あるいは皇子であった。記紀の主人公は頻りに「色好み」の人とされ、奈良時代の「色好み」にはまだ肯定的な意味があった。しかし、平安時代になると、主人公の場合には、この言葉を使わなくなった。平安物語の主人公、「昔男」か「光源氏」は「色好み」の人ではなく、「みやび」の文化の代表者になっている。「色好み」という言葉は既に否定的な意味を持ち始めたが、その肯定的な意味は「みやび」にある。全てをまとめてみると、『伊勢物語』の作者は理想的な主人公について「色好み」という言葉を使わず、「みやび」という言葉を使い、一方、他の登場人物の場合には、「みやび」を使わず、頻りに「色好み」を使っている。『伊勢物語』をある程度題材にした『源氏物語』の場合も同じである。

しかし、伊勢物語の主人公は、その理想的な男性はこの重層的な概念以外、もう一つの美意識につながっている。主人公は様々な場面で「あはれ」を知る男として出ている。理想的な男性は事情を見、「あはれ」だと思い、相手の女性と一緒に夜を過ごす。そのため、あまり教養を受けていない田舎の女性と歌を交わしたり、九十九歳の老女と寝たりしてしまう。『伊勢物語』の主人公は「あはれ」をもって、行動している。しかし、その「あはれ」は現在の哀れではない、そして「可愛そうだ」という意味も持っていない。中古文学のテキストを見ると、「みやび」と同じように複雑な理念であり、「あはれ」のそれぞれの言葉の意味には、それぞれの意味に共通したニュアンスが潜んでいる。それは情け、あるいは感動、感情だと言える。しかし、その情けを表すことができるのは一般の人ではなく、貴族階級だけなのである。『伊勢物語』の主人公は和歌を巧みに詠む貴公子なので、「情け」を知らないと断言する人はいないであろう。納得なさらない方もいらっしゃるかもしれないが、『伊勢物語』などの物語によく出てくる「あはれなり」という言い方は、恋愛のことが分かる、相手の情けをくむという意味であると思う。だから、『伊勢物語』の主人公は「あはれ」を知る男性であると同時に「いちはやきみやび」の理想的な男性であると言える。「みやび」と「あはれ」の二つの美意識を代表する理想的な男性自身、また美的概念になっている。

当然そういう理想的な恋人に、貴族の娘たちが憧れを持ち、また、男性のほうも面白がっていた。作者は理想的な男性をもって、『伊勢物語』の段の中で恋愛の様々なアспект、あるいは恋愛のバリエーションを見せている。理想的な男性の美的概念を最も勉強したのは、『源氏物語』を書いた紫式部であるが、歌物語の中でもその理想は、基本になっていたと思う。『平中物語』の平貞文は恋愛関係作りによく失敗するが、貞文は理想的な男性のパロディーであると思われる。『篁物語』の小野篁は理想的な男性に及ばないが、

『伊勢物語』からいくつかのモチーフを借りている。物語の世界の恋愛のパラダイムを作り上げたのは『伊勢物語』の理想的な男性であると言える。『伊勢物語』が存在していなかったら、おそらく『源氏物語』も書かれてなかったであろう。ひょっとすると、『伊勢物語』は日本文学の「マスターナラティブ」かもしれない。